

わが国におけるソーシャルワークの価値に関する基礎的研究

—— ソーシャルワークの価値と仏教思想の関連の検討

新保 祐光・浅沼 太郎・笠井穂乃香・吉水 岳彦
鷺見 宗信・田中美喜子・石川 到寛

要旨 ソーシャルワークのグローバル定義の改訂では、地域性も尊重されることとなった。日本におけるソーシャルワークは、近代社会事業からの成り立ちを踏まえれば仏教思想の影響があることが推測される。そのため本研究ではソーシャルワークの価値と仏教思想との関連について検討する。

方法は、仏教と社会福祉の双方に関する知識を持つ仏教社会福祉学会会員に対して郵送調査をおこなった（全数調査）。分析はアンケートの単純集計、及び自由記述欄に記述された内容についてテキスト型データ解析を行なった。

その結果ソーシャルワークの価値に関するキーワードのなかで「社会的結束」「人々のエンパワメント」が仏教思想との関連が強いことが示された。

I. はじめに

2014年に世界基準としてのグローバル定義が改訂された際、地域や国に応じたソーシャルワークのあり方も尊重することが強調された。今回の改訂の重要な点の一つである。ソーシャルワークがグローバルな視点（石川2012）でとらえていく必要があることが示されるなかで、日本における地域や国を尊重したソーシャルワークとは何かを検討することが求められよう。

同時に日本では保健医療福祉に関わる政策課題として、地域包括ケアシステムの構築が推進されている。そのなかでは多職種協働が前提となるが、

協働はそれぞれの専門職の自立（律）を基盤とする（福山2014）。地域包括ケアシステムに関わる専門職は、ヒューマンサービスとして共通の部分の踏まえつつも、自らの専門性を自覚し発揮できることが求められる。そのためにはソーシャルワークとは何かの検討は重要な課題である。

このようにソーシャルワークとは何かを検討する必要性が国内外から求められるなか、その手がかりの一つは構成要素である。Bartlett（=1989）は、ソーシャルワークの構成要素として知識、技術、価値をあげる。本稿ではこのなかで特に価値に焦点を絞り検討する。これはソーシャルワークの技術、知識は、価値を基盤にしているためである（石川2012）。価値を基盤にするとは、たとえば自律や人権尊重を支援する際、状況理解や支援のための知識や技術は、価値を踏まえて具体的に展開されるということである。

日本におけるソーシャルワークの価値を考えるうえで、近代社会事業からの成り立ち、またその背景となる日本文化における宗教の影響を踏まえると、仏教思想の影響を看過することはできない。

SHIMPO Hiromitsu, YOSHIMIZU Gakugen,
WASHIMI Munenobu ISHIKAWA Togaku
大正大学
TANAKA Mikiko
長崎純心大学
KASAI Honoka
江戸川区教育委員会
ASANUMA Taro
帝京科学大学

そこで本研究ではソーシャルワークの価値と仏教思想の関連について検討していく。

Ⅱ. 本研究における前提

1) 価値とは何か

本研究において価値とは「望ましきとして行為判断に影響を与える基準とする。この望ましきさは、望ましくないものとしての反価値も含む」(新保2014)とする。ソーシャルワークの価値として換言すれば、ソーシャルワーカーの専門職判断に影響を与える望ましきさの基準である。つまりソーシャルワークに関わる現象や行為を、専門職判断にあたり望ましきさの基準で意味づけるのが価値である。

たとえば支援が必要な人と関わるという行為に対して、彼のために何かをすると意味づけるのが望ましいのか、彼とともに何かをすると意味づけるのが望ましいのかということである。この望ましきさの意味づけ、つまり価値によって、ソーシャルワーカーは対象者に対して、どう話しかけるのか、何をするのかという専門職としての判断、実践が方向付けられる。だからこそ専門職実践の基盤となる。

価値には絶対主義、倫理普遍主義、文化相対主義、相対主義等様々な立場があるが、本研究では文化相対主義の立場をとる。文化相対主義は、社会や集団それぞれにある価値を尊重する多元的価値観を前提とする。これは今回のソーシャルワークの定義にみられる、国や地域の独自性を強調することと重なる。

そしてこの多元的価値観を前提とする以上、価値はそれぞれに影響し合う多様な要素の集合となり、価値システムとして捉えていく必要がある。例えばソーシャルワーカーとしての価値に、各地域や国等、集団によって異なる価値が関連しあうことで、各地域や国のソーシャルワークの価値としてのサブカテゴリーが出来る。このサブカテゴリーのなかも、生活を支援するソーシャルワークでは、制度や文化、宗教等のマクロレベルから、

地域、集団などのメソレベル、個人的な関係などのミクロレベルも含めて、多様な価値が影響するであろう。そして本研究は、この価値をシステムとして捉える立場を前提とし、日本における仏教思想とソーシャルワークの価値との関連を検討しようとするものである。

2) 仏教思想とは何か

思想も価値同様、行為の指針となる考え方である。ただし価値は社会や時代などの多様な影響のなかである程度の変化を前提とするが、思想は反省を繰り返し確立されてきたものであり、価値よりは変化しがたいものである。そのうえで本論における仏教思想とは何か。この思想の定義にあてはめれば、仏教という枠組みのなかで反省を繰り返しながら、確立された行為の指針となる考え方である。

ただし日本における仏教思想の特徴として、日本の仏教には多様な宗派があり、それぞれに思想を確立してきたことに配慮しなければならない。この配慮に関しては分析方法の欄で詳しく記述する。

3) 先行研究

ソーシャルワークの価値に関しては、ソーシャルワーク専門職団体の倫理綱領が実践家の指針として位置づけられている。この専門職団体の倫理綱領は、はじめに全米ソーシャルワーカー協会(National Association of Social Work 以下NASW)が1960年に策定した。このNASWの倫理綱領を、戦後に専門職団体や資格ができた日本では参考にし、応用展開してきた。NASWの影響を強く受けたことは、日本の戦後の社会福祉、その背景となる民主主義社会の成り立ち、ソーシャルワーク理論の展開からも裏付けられよう。

このNASWの倫理綱領は、ソーシャルワーカーの専門職としての共通基盤を探求するなかでつくられたものである。またこの時代には、宗教学者でもあったWeber (=1988) の事実認識と価値判断を区別すべきとの考え方が強く社会学には影響

していた時代でもあった。そのため宗教を尊重しつつも、NSAWの倫理綱領では宗教的な内容はほとんどみられない。

しかしながらソーシャルワークの価値、原則については倫理綱領以外で説明されることも多い。代表的な例が、日本において翻訳され、社会福祉系の専門職のテキストのなかで今も多く記述され、半世紀以上たったいまでも重要だと位置づけられている Biestek (=1996) や Kohs (=1989) による原則や価値である。

この2つは1950年代から60年代にかけて、当時のアメリカの基督教倫理観の強い影響のもと書かれている。これらが半世紀以上たった今も有用な理論としてテキストなどで取り上げられていることこそが、ソーシャルワークの価値と宗教思想の関連を少なからず示していると考ええる。そのため、本研究における先行研究のなかで重視すべきものとして、Biestekのケースワークの原則と Kohsのソーシャルワークの根源としての価値をあげる。

Biestekはソーシャルワーク研究者でもあったが、聖職者(American priest)でもあり、ケースワークの端緒が宗教家の慈善事業であったことを踏まえながら、宗教的な価値観に基づく援助関係に必要な原則や援助者の態度について提示した。Kohsは、ソーシャルワーク実践の根底にある、カトリックやユダヤ、プロテスタントのそれぞれの倫理観や思想について言及し、最期にソーシャルワークの根源としての基督教観を提示している。この2つは、宗教思想とソーシャルワークの価値との関連を考えるうえで、多くの示唆に富む先行研究であると考ええる。

秋元(2018)がいうように、ソーシャルワーク専門職がある程度確立されたのが基督教文化圏であり、その内容が世界基準となった。しかしそのほかの文化圏でもソーシャルワークのあり方が同じでよいのかという疑問は残る。我が国であれば、仏教の長い歴史と社会事業の萌芽期の仏教者の実践を見れば、仏教とソーシャルワークとの

価値との関連を検討する必要があるだろう。

4) 研究の目的

ソーシャルワークの価値として宗教的な影響を強く受けたBiestekやKohsが今も専門職のテキストのなかで多く記述されることに、ソーシャルワークの価値への宗教思想の関連があると考ええる。そして日本には仏教の長い歴史と、社会事業の萌芽期に多くの優れた仏教者の実践があった。また石川(2012)、新保(2014)などの実践を理論化しようとする試みのなかで、宗教思想の影響が議論されることがたびたびあった。これらのことから「日本におけるソーシャルワークの価値には仏教思想との関連がある」との直観¹⁾を得た。この直観を磨き上げることで、日本におけるソーシャルワークの特性を少しでも具体的に示すことが出来るのではないかと考える。

ただしソーシャルワークの価値の検討は、多様な立場、多様な視点から出来るため、焦点を絞らないと散漫になる。そのため本研究は、仏教と社会福祉の双方に関する知識を持つ仏教社会福祉学会会員に対して、ソーシャルワークの価値と仏教思想の関連についての意識調査をおこない、仏教思想に関連の強い、または弱い概念を検討することで、わが国のソーシャルワークの価値の検討のための手がかりをつかむことを目的としている。

Ⅲ. 研究方法

1) 調査概要

(1) 期間：2014年12月中旬～2015年1月末

(2) 対象：仏教者社会福祉学会全会員に対するアンケート調査(全数調査)

(3) 内容：

- ①基本属性(性別・年齢・宗派・専門領域・職歴等)
- ②2014年に改定されたソーシャルワークのグローバル定義のキーワードに関して、仏教思想を用いて説明することの望ましさに関する意識調査(4件法)をおこなった。自由記述

欄には、その理由や望ましいと思われる概念を記述してもらった。

- ③本研究の先行研究のなかで重要と考えるBiestekの7原則に対する違和感の有無を5件法で記述してもらった。違和感を感じる場合にはその内容を記述してもらった。

*②については、望ましさを聞くという意図から中央値（どちらでもない）を省く4件法とした。③については、中央値（違和感を感じないが支持もしない）がありえるため5件法とした。

（4）回収率：23.1%（46通）。

2）分析方法

回答数が少ないことからアンケート結果は単純集計のみ行った（割合は小数点2桁以下四捨五入をおこなった。そのため合計が100にならない場合がある）。

自由記述回答欄に関しては、一つ一つの回答を丁寧に読み込むことに代えて、テキスト型データ解析ソフトウェアであるWordMinerを使用し、データ解析をおこなう。これは先に挙げた日本の宗派ごとに思想を確立してきたことの配慮を意図している。

この配慮とは、前提として自由記述欄の回答はそれぞれが所属する宗派の思想を基盤に、一貫性のあるストーリーとして記述されている。そのためすべての意見について、一部を切り取って解釈することは回答の本質を損なう可能性が高い。さらに分析に関わる調査者の多くが僧籍を持っており、特定の宗派の思想的バイアスも避けなければならない。

そのため、自由記述欄を調査者によって恣意的に切片化し分析するのではなく、仏教思想として共有できそうな概念、キーワードを探っていくという意図から、自由記述欄は記述された概念や単語の表出頻度や関連を可能な限り客観的に把握できるテキスト型データ解析を行うこととした。

具体的には対応分析を用いて、構成要素（分かち書き処理した抽出語）と質的変数（グローバル定義のキーワード）間の関連等を探索する。この対応分析の結果から、頻度の高い構成要素を上位から並べ、その結果を基に考察する。

分かち書きにあたっては、ソーシャルワークのグローバル定義のキーワードをシステムとして捉える意図から、「社会変革と社会開発」「社会的結束」「人々のエンパワメント」「人々の解放」「社会正義」「人権」「集団的責任」「多様性尊重」と「グローバル定義」を一つの単語として抽出できるようにした。

さらにBiestekの原則のキーワードである「個別化」「意図的な感情表出」「統制された情緒関与」「受容」「非審判的態度」「自己決定」「秘密保持」をくわえた。

IV. 調査結果

1）アンケート調査単純集計

（1）回答者の属性

表1によると、性別は男性が73.9%、女性が23.9%であった。男性が4分の3と偏りが出ているが、専門職実践の価値の検討であるため結果に対する性差のバイアスはあまりないと考える。年齢に関しては、40代から60代ですべて20%を超えており、この年代で全体の70%を超える。学会における調査のためこの層が多いが、年齢的には教育に関わる、または現場でも指導的役割にある年代の回答が多いと考える。そのため回答数は少ないが、回答者の価値に対する回答は、実践現場に対して影響は小さくないと考える。所属宗派に関しては、浄土真宗（26.1%）、浄土宗（23.9%）が多かった。

専門領域に関しては、異動や転職、研究領域の変更などで必ずしも一つと限定できない可能性があることから複数回答可とした。結果としては、児童が17.1%、高齢が18.8%、障害が15.6%、地域福祉が17.2%と、それぞれの領域に一定の割合があり、顕著な偏りはなかった。実践経験については、なしが32.6%と一番多い。しかし経験がある層を

表 1：回答者の属性

N = 46.人 () 内は%

性別	男性 34 (73.9)		女性 11 (23.9)		回答なし 1 (2.1)		
年 齢	20代	30代	40代	50代	60代	70代	その他
	1 (2.1)	7 (15.2)	12 (26.1)	10 (21.7)	11 (23.9)	3 (6.5)	2 (4.3)
所属宗派	天台宗	真言宗	浄土宗	日蓮宗	浄土真宗	禅宗	その他
	1 (2.1)	5 (10.9)	11 (23.9)	4 (8.7)	12 (26.1)	3 (6.5)	10 (21.7)
専門領域＊	児童		高齢	障害	低所得者	地域福祉	その他
	11 (17.2)		12 (18.8)	10 (15.6)	6 (9.4)	11 (17.2)	14 (21.9)
実践経験年数	なし		5年未満	5～10年未満		10～20年未満	20年以上
	15 (32.6)		7 (15.2)	6 (13.0)		10 (21.7)	8 (17.4)
相談支援に関わる資格の有無 (国家資格に限定しない)			あり		なし		回答無し
			19 (41.3)		25 (54.3)		2 (4.3)
社会福祉に関する専門職団体への加入			あり		なし		回答無し
			17 (37.0)		27 (58.7)		2 (4.3)

*は複数回答可

10年未満と10年以上に大別すると、全くなしが32.6%、10年未満の経験が28.2%、10年以上が39.1%と、経験の有無の関しても大きな偏りはないと言える。

社会福祉に関する資格の有無では、ありが41.3%、なしが54.3%であった。また社会福祉に係る専門職団体への加入状況は、ありが37.0%、なしが58.7%だった。資格の有無と専門職団体の加入はほぼ同じ割合であり、少しだけ団体の加入が少ないのは、加入団体がいない社会福祉主事、児童福祉司の任用資格のみの場合であった。

(2) ソーシャルワークのグローバル定義(2014年改訂版)のキーワードを検討する際の仏教思想の有用性について

本結果の分析については、表2として示した。質問紙に示した4俟法に未回答をくわえた5項の結果について、「望ましい」(積極的支持)と「可能」(消極的支持)と回答した「支持群」と、困難や不可能とする「否定群」の二群の回答比率の比較をおこなう。また本調査は、日本におけるソーシャルワークの価値を、仏教思想と関連づけて検討していくことを目的としていることから、仏教

思想を用いることが望ましいという積極的支持の回答率にも注目する。

支持群と否定群の比較では、「人々のエンパワメント(支持群89.2%：否定群6.5%)」「社会結束(支持群89.1%：否定群8.7%)」の2項目で支持群が否定群を80%以上上回っていた。「人々の開放(支持群84.8%：否定群10.9%)」「多様性尊重(支持群82.6%：否定群6.5%)」の2項目は、支持群と否定群の差がだいたい75%と、先の2項目よりは支持群の優位性が少し低くなっている。「集団的責任(支持群78.2%：否定群15.2%)」「社会正義(支持群63.0%：否定群21.7%)」「人権(支持群71.7%：否定群19.5%)」の3項目に関しては、支持群と否定群の差が63.0%、41.3%、52.2%と上記の4項目とは顕著な差があった。

また、説明し直すことが望ましいとされる積極的支持と否定群の回答比率を見ていくと、「人々のエンパワメント(積極的支持19.6%：否定群6.5%)」「社会結束(積極的支持23.9%：否定群8.7%)」「多様性尊重(積極的支持17.4%：否定群6.5%)」の3項目は、積極的支持が否定の割合を10%以上上回っている。「人々の解放」は、積極的支持が10.9%、

表 2：日本におけるソーシャルワークの定義を検討する際に、グローバル定義のキーワードを仏教思想を用いて説明し直すことの有用性に関する意識調査

N = 46 () 内は%

	望ましい	可能	困難	不可能	未回答
社会変革と社会開発	9 (19.6)	31 (67.4)	2 (4.3)	1 (2.2)	3 (6.5)
社会的結束	11 (23.9)	30 (65.2)	4 (8.7)	0 (0)	1 (2.2)
人々のエンパワメント	9 (19.6)	32 (69.6)	3 (6.5)	0 (0)	2 (4.3)
人々の開放	5 (10.9)	34 (73.9)	5 (10.9)	0 (0)	2 (4.3)
社会正義	3 (6.5)	26 (56.5)	10 (21.7)	0 (0)	7 (15.2)
人権	6 (13.0)	27 (58.7)	7 (15.2)	2 (4.3)	4 (8.7)
集团的責任	6 (13.0)	30 (65.2)	7 (15.2)	0 (0)	3 (6.5)
多様性尊重	8 (17.4)	30 (65.2)	3 (6.5)	0 (0)	5 (10.9)

表 3：Biestek の原則に対する違和感について

N = 46 () 内は%

	強く感じる	やや感じる	どちらでもない	原則を支持	強く支持	未回答
個別化	1 (2.2)	4 (8.7)	24 (52.2)	8 (17.4)	4 (8.7)	5 (10.9)
意図的な感情表出	1 (2.2)	5 (10.9)	23 (50)	6 (13.0)	7 (15.2)	4 (8.7)
統制された情緒関与	1 (2.2)	2 (4.3)	24 (52.2)	9 (19.6)	6 (13.0)	4 (8.7)
受容	1 (2.2)	2 (4.3)	21 (45.7)	8 (17.4)	10 (21.7)	4 (8.7)
非審判的態度	1 (2.2)	2 (4.3)	20 (43.5)	11 (23.9)	8 (17.4)	4 (8.7)
自己決定	3 (6.5)	6 (13.0)	20 (43.5)	10 (21.7)	3 (6.5)	4 (8.7)
秘密保持	1 (2.2)	2 (4.3)	20 (43.5)	10 (21.7)	9 (19.6)	4 (8.7)

否定群10.9%とほぼ近い割合になっている。

反対に「社会正義（積極的支持6.5%：否定群21.7%）」「人権（積極的支持13.0%：否定群15.2%）」「集团的責任（積極的支持13.0%：否定群15.2%）」の3項目では、否定群が積極的支持を上回っている。

とくに「社会正義」と「人権」は、否定群が高い割合でかつ積極的支持を大きく上回っているだけでなく、他の項目に比べて未回答の割合も高い。

上記の2項目の比較から、「人々のエンパワメント」「社会結束」については、仏教思想を用いた説明が望ましいとされる概念であることが示された。反対に「社会正義」「人権」は、他の項目に比べて未回答の割合も高く、仏教思想を用いた説明は困難であると思う会員が多いことを示している。

(3) Biestek の原則に対する違和感について

表3のBiestekの原則に対する違和感に関しては、すべての回答で「どちらでもない」が約半数であった。「強く感じる」と「やや感じる」をあわせた、違和感があるとした回答は「統制された情緒関与」「需要」「非審判的態度」「秘密保持」の4項目で6.3%、「個別化」が10.9%、「意図的な感情表出」が13.1%、「自己決定」が19.5%と全体的に少なかった。

このなかでも「自己決定」が、「違和感がある」とする回答が約20%とほかの項目よりも特に高いことにくわえ違和感を「強く感じる」が6.5%あることを考えれば、仏教思想とキリスト教思想の違いを「自己決定」を糸口に検討していくことが一つの手がかりになると考える。

また属性と上記の結果をクロス集計した結果を

表 4 :

「グローバル定 義」全般 サンプル数：1 異なり構成要 素数：105	「バイステック 意図的な感情 表出」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：17	「バイステック 個別化」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：30	「バイステック 自己決定」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：15	「バイステック 受容」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：23	「バイステック 統制された情 緒関与」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：8	「バイステック 秘密保持」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：15	「バイステック 非審判的態 度」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：9	「社会正義」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：50	「社会的結束」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：68	「社会変革と 社会開発」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：90	「集団的責任」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：63	「人々のエンバ ワメント」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：62	「人々の解放」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：50	「人権」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：65	「多様性尊重」 サンプル数：1 異なり構成要 素数：4
上位1 一般	感情 家族	意図 本人	意見 本人	説法 相手	自身 自己	信頼 関係	態度 醸成	正義 見方	結束 連帯	社会 変革	責任 共同	本願 仏性	解放 解説	権利 尊重	共生 模倣
上位2 価値	表出 意図	強調 違和感	原則 状態	敬尊 成立	自己 現場	関係 条件	醸成 段階	見方 抑圧	連帯 縁起	変革 開発	共同 行為	仏性 他者	解説 無我	尊重 存在	模倣 直感
上位3 仏教	意図 違和感	視点 尊重	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位4 回答	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位5 項目	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位6 先進	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位7 日常	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位8 文化	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位9 凡夫	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位10 倫理	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位11 支援	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位12 用語	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位13 発展	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位14 福祉	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位15 キリスト教	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位16 活用	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位17 主義	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位18 生活	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位19 定義	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位20 課題	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
上位21 言葉	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
下位4	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
下位3 縁起	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
下位2 解放	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明
下位1 思想	違和感 現場	尊重 基本	状態 相手	敬尊 表現	現場 検討	条件 醸成	段階 対応	抑圧 概念	縁起 強調	開発 近代	行為 集団	他者 菩薩	無我 人間	存在 尊厳	直感 説明

見ると、実践経験が10年以上の回答者の50%が「自己決定」に「違和感がある」と回答していた。「自己決定」に対する違和感の有無に有意に影響するのは、実践経験の可能性も示唆された。

以上のことを踏まえるとBiestekの原則は、キリスト教の影響が強いといえども同じ宗教者としてその内容に賛同できる、または理解しやすいという結果が出たといえる。

2) 自由記述欄のテキスト型データ解析

(1) 対応分析の結果

表4の対応分析の結果を見ると、グローバル定義との関連からは特徴はあまり読み取れなかった。グローバル定義のキーワードおよびBiestekの各原則との対応を見ていくと、上位に仏教思想との対応が多く見られるのは、ソーシャルワークのグローバル定義のなかでは「社会的結束」「人々のエンパワメント」「人々の開放」、Biestekの原則のなかでは「受容」であった。

具体的な内容を見ていくと「社会的結束」では「縁起」が上位であった。「人々のエンパワメント」では、「本願」「仏性」「菩薩」の概念が上位であった。「人々の開放」では、「解脱」「無我」「煩惱」が上位であった。「受容」では、「説法」「釈尊」が上位であった。このほか異なり構成要素²⁾は少ないが「多様性の尊重」では、「共生」が上位であった。

また、Biestekの原則のなかで「違和感」という言葉との関連が上位にきたのは、「個別化」「意図的な感情表出」であった。

V. まとめ

単純集計の結果と自由記述欄の対応分析の結果、「社会的結束」「人々のエンパワメント」は一貫して仏教思想との関連が強く示されている。この2つの概念は、日本におけるソーシャルワークの価値、定義を考えるうえで仏教思想に基づきより日本らしい再定義が出来る可能性が示唆された。また「人々の開放」「受容」は、他のキーワードよ

りは仏教思想との関連が示された。

最後に本研究は、調査対象者及びそこから得られた回答が少なかったことから、日本におけるソーシャルワークの定義までは言及できていない。これは思想や価値という本調査のキーワードが、複雑かつ抽象度の高い内容であり対象者の選定が困難であったことと、調査対象者のなかでも概念が十分に共有できなかったため、調査対象者の方々が持っているリッチなデータを十分に引き出せなかったことが原因である。そのため本調査の結果は今後の手がかりをつかむにとどまり、価値の内容には踏み込めていない。

仏教思想とは何かを示すことは、宗派色の強い日本仏教では簡単ではない。しかしこれは、キリスト教などのほかの宗派でもKohsがそれぞれに分析したように、カトリック、プロテスタント、ユダヤ等、濃淡はあれども宗派色はみられる。そのためあえて本調査の方法は、量的調査やテキストデータ解析ソフトを使うことで共有できる結果を目指そうとしており、調査目的・方法の限界ではない。

また、より丁寧なインタビューも行うべきであろう。思想、価値については一方的なアンケートでは、誤解が生じる可能性が高い。今後の研究では、この2点を踏まえてより内容に深く踏み込む検討を進めていく必要がある。

なお本研究は、科研費（基盤C：25380770）の助成、及び日本仏教社会福祉学会（アンケート協力、及び第50回大会：至淑徳大学、51回大会：至立正大学にて報告）の協力を得て実施した。心から感謝の意を表したい。

註

- 1) 直観とは自らの知識と経験のなかで、おぼろげながらも見えている指針であり、知識と経験を循環させるなかでみがかれ明確になってくるもの（新保2014）。
- 2) 異なり構成要素とは、回答者が記述した語句の重複の程度を示すものであり、大きいほど重複

が多かったことを示す。

文献

- 秋元樹 (2018) 「西洋専門職ソーシャルワークのグローバル化と仏教ソーシャルワークの探求」 郷堀ヨゼフ編著『西洋生まれ専門職ソーシャルワークから仏教ソーシャルワークへ』学文社. pp.1-54.
- Bartlett, H. M. (1970) *The common base of social work practice*. NASW press. (=1989, 小松 源助訳『社会福祉実践の共通基盤』復刊, ミネルヴァ書房.)
- Butrym, Z. T. (1976) *The nature of social work*. Macmillan press. (=1986, 川田誉音『ソーシャルワークとは何か—その本質と機能』川島書店.)
- Biestek, F. P. (1957) *The casework relationship*. Loyala university press. (=1996, 尾崎新・福田俊子・原田和幸訳, 『ケースワークの原則 (新訳版) —援助関係を形成する技法』誠信書房.
- Cohs, C. S. (1970) The roots of socialwork. National Board of Young Mens Christian Associations Press. (=1989, 小島蓉子・岡田藤太郎訳『ソーシャルワークの根源—実戦と価値のルーツを求めて』誠信書房)
- 福山和女 (2009) 「ソーシャルワークにおける協働とその技法」『ソーシャルワーク研究』34 (4), 相川書房, pp.4-16.
- 石川到覚 (2015) 「社会福祉実践の協働モデルを目指して」『鴨台社会福祉論集』24巻, pp.44-50.
- Max Weber (1904) Die “Objektivität” sozialwissenschaftlicher und sozialpolitischer Erkenntnis. (=1998, 富永祐治・折原浩・立野保男訳『社会科学と社会政策にかかわる認識の「客観性」』岩波文庫)
- 新保祐光 (2014) 『退院支援のソーシャルワーカー—当事者支援システムにおける状況的価値の形成—』相川書房.